AYZ-405

何其芳の詩にみる感情の変化を追って

――「預言」から「文芸講話」の時期について

一橋大学大学院社会学研究科
大沼正博

一橋大学 昭和図書館 所属
5500709

目次

はじめに …… 1頁
1. 「預言」の時期について …… 6
2. 成都 …… 46
3. 「夜の歌と昼の歌」 …… 67
4. 何其芳の詩をめぐる時期について

はじめに

何其芳という人はその人柄のためか日本の評者に好感を持たれているようである。① また「中国文学について漫然として持ちはじめていた映像」を何其芳によって打ち破られた人も多いようであろう。② すると何其芳は現代中国文学の主流からは、はずれた位置を歩いてきたと言えるのかも知れない。しかしここでそれを見究める余力はない。

何其芳は象徴派詩人として出発した。一九

論争 130

おわりに 150

補記 155

注釈 165

一二年四川省に生まれ、北京大学哲学科に籍を置いて詩を発表しはじめる。その詩は卞之林、李広田との合同詩集『漢園集』に『燕泥集』として収められるが、武田泰淳が「彼らの詩に較べると大部難解である。精神の複雑なためである。まづヴァレリイの精神の政治学にでも精通してからでなければ訳せないかもわからぬ」と評し、彼らを「知性派三人組」と名づけたような詩であった。③その何其芳が、やがて中国の現状を認

識して社会問題に目を向けてゆき、ついに延安に身を投じて魯迅文学芸術学院の教授になる。そして解放後は科学院文学研究所副所長から、鄭振鐸に継いで所長となり、文学評論家として指導的役割を果たす。現実離れした象徴主義から革命的社会主義へという思想上の大転換は、当時のインテリ作家の中で何其芳ほど鮮かな例はなかった。④

延安で、何其芳は文芸座談会に出席して「文芸講話」を聞き、整風運動を経験した。そ

れ以前に彼は数篇の散文と多数の詩を発表している。整風後の何其芳の自己批判によれば、それらの作品は小資産階級意識の充満したものであった。何其芳が象徴派詩人としてから整風運動を迎えるまでに発表した作品と、それに対する自己批判とを検討することによって、整風運動当時の彼の意識を探ぐる糸口としてみたい。そこには整風運動で批判された他の作家たちとの共通点もあるだろうし、もちろん彼独特のものもあるだろう。本論文で

は象徴派詩人として出発してから、整風運動を迎えるまでの彼の足取りを順に追ってゆくことにする。

さいわいに当時の作品はまとめて出版されているものが多いが、手を加えたものや未発表のもの、手に入らないものもある。それらについては一部は延安『解放日報』により、一部は新島淳良氏の論文に訳出されたものによった。

1.

「預言」の時期について

何其芳が第一詩集と自称する詩集「預言」は一九四五年に初版が出ており、三一年から三七年にかけての詩、①つまり北京で彼が本格的に詩を書き始めてから、抗戦の勃発のために故郷に帰るまでの時期に書かれた詩が収められている。「預言」は三輯に分けられており、第一輯には三一年から三二年の詩、第二輯には三三年から三四年の詩、そして第三輯には三五年以後の詩が収録されているという②。何

其芳はまた延安に到着する前にも詩をまとめて発表している。卞之林、李広田との合同詩集「漢園集」の中の「燕泥集」と、散文、小説、戯曲とともに編集した「刻意集」とである。「燕泥集」は二輯から成り、「預言」と同様に第一輯には三一年から三二年の詩を、第二輯には三三年から三四年の詩を収めている。「刻意集」の詩が収められている巻四は、三二年から三五年の三つの部分に分けられている。「

三四年二月から四月、三四年

預言』には『燕泥集』『刻意集』の大部分の詩が再録され、それに第三輯の詩が加えられた形になっている。③そこで延安に到るまでの何其芳の足跡をたどるのに、この三輯の詩情はそれぞれ異ったものを持っている。そこで延安に到るまでの何其芳の足跡をたどるのに、この三輯の時期に区分して考えてゆくのが適当であろう。④『刻意集』は三部分に分かれているが第一部分が第一輯に、第二、第三部分が第二輯に相当する。（第一部分の三三年の詩は春の作品が一首収録されているだけである。）そうする

と第二輯に三五年の詩が含まれることになるが、後述するように第二輯と第三輯を区別する重大な転機は、三五年夏の北京大学卒業によってもたらされるのであり、第三部分に収録されているのは三五年春までの詩なので、何其芳の精神史をたどるうえでは第二輯の時期に入れてさしつかえないし、適切でもある。この三輯の世界をひとことで言うならば、第一輯と第二輯では自分の心情に忠実に技巧を凝らして幻想の王国を築いていて、その間の

移行は微妙なものとも言えるけれど、第三輯の世界では自分の心情を素朴に吐露していて、第一輯とは全く違った世界が出現しているのに気付くということになるだろう。そしてこの第三輯に表現された感情を持って、何其芳は失恋を経験して本格的に詩を書き出したようだ⑤。その経過を彼は次のように語る。

※中国語では「愛情」は男女間の恋愛感情を指す。本論文ではすべてこの意味で使う。

ある夏、ある鬱陶しい多雨の季節が、奇妙な風でもって私を撫で、揺さぶり、打ち毀し、最後に一面の淋しく艶やかな秋の光を私に残した。その時私ははじめて、磨かれた璞玉がそれ自身の輝きを放つように、私自身の心の中に、自然に流露する混じり気のない音を聞いた⑥。

彼はのちにこの失恋を「不幸な愛情」*と言葉で呼ぶ（「慨嘆」）。そして「一面の淋しく艶やかな光」の中で「景色を惜しんで立ち

去らない人へ（留連光景的人）」と自称した。⑦そ
の頃心酔したのは晩唐五代の詩詞、フランス
高踏派の詩人であった。⑧

第一輯には恋愛を主題にした詩が多い。け
れどもそれは、湧き上がる感情の昂ぶりをそ
のまま対象にぶつける、といった激しい調
子のものではなくて、むしろ感情の昂ぶりを
冷静に抑制しているようにみえる。知性派と
言われ、みせかけの感覚過剰と言われる所以
であろう。⑨失恋の痛手がそうさせているのか

も知れない。「ほとんど絶望しながら恋愛を待
ち焦がれ」、「毎夜死と隣り合わせになるほど
寂しく、「人々を捨てながら人々から捨てら
れた悲愛を感じる」寂寞で孤独な青春の魂が、
恋愛を美化し、そこに救いを見い出そうとし
たのであった。何其芳は恋愛を限りなく美化
し、恋愛からそれを美しくする要素のみを抽
出して華麗な詩の世界を築き上げ、その香気
の中に耽溺していた。「私と同じように寂しい
子供も、それから少しばかりの快楽と慰安を

得られるように希った」⑩という言葉が、彼が詩に求めたものを言い表わしている。愛情は「人と人の間の情誼に異性間の吸引力の加わったもの」へ「夜の歌」(四)という句からも、彼が恋愛に孤独の救いを求めたことが見てとれる。ところで「刻意集」巻二の戯曲「夏の夜」に主人公齊辛生が過去の失恋を告白する場面がある。それが何其芳自身の「不幸な愛情」の告白と考えるならば、彼の恋愛はなんどか綾が戻ったことになる。すると第一輯の

詩の中に、実際に恋愛をしつつ書いたものがあることになる。そのようにとれる詩も確かにある。しかしあくまでも第一輯の基調であるのは、限りなく美化された仮空の恋愛の醸し出す雰囲気に恥って快楽と慰安を求めている、寂寞とした孤独な青春の魂の姿であった。

「不幸な愛情」も、現実の恋愛に夢想された恋愛の像を無謀に重ね合わせようとした結果なのかも知れない。

何其芳は自分の心情を大切にした。その詩

の作られ方を彼は次のように説明する。

私はある概念が閃めいてからその形体を探し求めるのではない、私の心に浮かび上がるのはいくつかの色彩と図案とである。⑪また次のような言葉にも彼の詩の特徴が言い表わされている。

人生で私が心を動かされるのはその表現だけである。私は是非の見識のない人間である。一切の事物を判断するのに、私は好きだとか嫌いだとか言う。世間の嫌悪する

役でも、ある人が精彩に演ずると夢中にならずにいられない。色の美しい花には美しい姿が必要なのだ。⑫

温庭筠の詩についてのエピソードも、彼が詩の伝える意味にではなくて、表現された姿態の美しさに関心があったことを示している。

第一輯の詩はまさしく、「そうだ、私は泣いた、今夜がこんなに美しいから」(「満月の夜」)というような書かれ方をしていたのであった。

第一輯には恋愛を主題としたものの他に、

秋の訪れを歌う「秋」、故郷の庭の様子を描写して幼時を偲ぶ「昔年」、亡友に捧げた「花環」などがあるが、これらの詩もそれぞれの感情に基いてその気分を忠実に美しく表現している。そしてその雰囲気に耽溺して心地良さを味わっているように思える。第一輯冒頭の詩「預言」を訳出する。（三一年秋の作）

この心跳る日がついに来た。
お前の夜の嘆息にも似た近づく足音
私はっきり聞いた、木々の葉や夜風の

ささやきでも、
音でもないと。
大鹿が苔むした道を駆けるかそかな蹄の
話しておくれ、お前の銀鈴の歌声で話し
ておくれ
お前は預言の中の年若い神なのか？
お前は温暖な南方から来たはずだ、
話しておくれ、そこの日の光、日の光を、
話しておくれ、春の風がどうやって花を

開かせ、
燕がどれほど緑楊に恋しているかを、
私はお前の夢のような歌声の中で眼を閉じよう、
その温さを私は覚えているようでもありまた
忘れたようでもある。
停めて下さい、長い道のりの奔走を
お入り、ここにお前の坐る虎皮の敷物が
ある、

秋の日々に拾った落葉を焼こう、
私が自分の歌を低く歌うのを聞いておく
れ、
その歌声は炎のように沈鬱になりまた高
揚する、
炎のように落葉の一生を物語る。
行ってはならない、行く手は無辺の森林
だ、
老木には野獣の斑文がある、

死にかけた籐が大蛇のようにまつわりつ
いている、
繁った葉は屋あかりを通さない、
お前は怯えて二歩目を踏み出せないだろ
う、
一歩目の寂しい木霊を聞いたときには。
どうしてもゆくのなら、私と一緒にゆき
なさい、
私の足は平らな道を知っている、

私は疲れを忘れる歌を唱いつづけよう、
それから、手のぬくもりをあげよう、
夜のとばりが私たちを閉ざしたら、
お前はじっと私の眼を見ればよい。
私の感動した歌声をお前は聞かない、
お前の足は私が顫えても少しも停ってく
れない、
穏やかなそよ風が黄昏を吹きぬけるよう
に、

消えてしまった、お前の傲慢な足音が…

ああ、お前は預言どおりに無言で来、

無言で去るのか、年若い神よ？

第二輯に入ると恋愛の歌が消える。闇の中に響く口バのイナキに遠方の友を偲ぶ「歳暮に人を懐う(一)」、風沙の吹きすさぶ日に熱帯をめざして進むセダンの幻想である「風沙の日」、夜汽車の光景を描く「眠れぬ夜」、風沙に見舞われる古都をさ迷う「古城」等が続く。

この変化は三三年の帰郷によってもたらされた⑬。第二輯冒頭の「柏林」はそのことを歌った詩である。かつて幼い自分が遊びまわった柏林を訪れた何其芳は、「この幼き日の広大な王国は／私の異郷の塵にまみれた足の下で／悲しいほどに小さい」ことを発見した。北京に帰ると「私の眼に映る空は色を変えていた。それはもう私に遙かな温かいものを想像させることはなかった」。古都は一面の「荒地」であり、彼には「押し殺した笑い声が聞こえる

ようであった。囚われた幽霊が出すのか私の心が出すのか分からなかったけれども」。この ことを彼は「荒涼とした季節」に入ったと表現している⑭。

こういう体験をした何其芳は、寂寞を伴ってはいたけれど無邪気なことこの上ない美しい恋愛の幻想の詩を書かなくなる。この時期の何其芳の大きな変化は題材を選ぶ視野が拡がったことにあった。その視線は「長い鋤の柄に沿って／汗は泥土に流れる／……略……／貪

婪に土中から掘り出す／人間よ、お前はじきに地下に睡るのだ」（「短歌両章　其二」）という ものにまで向けられる。「夜景」には「宮城の門外に労苦する人がいて／大きな冷たい石の板を枕に眠っている」という句がある。しかしこの詩に登場する「涙を流す石の獅子」が、「労苦する大衆の存在を知り、知っていながら石のように動くこともできぬインテリゲンチャを象徴している」とか、「短歌両章　其二」の「巨大な城（都市）の崩壊」が「変革

への待望」を象徴している⑮とするのは、あまりにも性急な解釈だと思う。当時、何其芳の心には「新しい思想が生長し始めていた」。そして貧しい新聞売りの少年を見て故郷の弟を思い出し、世間の冷酷、残忍を訴える物語を書こうとしたことを回想している⑯。けれども上記の二つの詩はもちろん、その他の詩、画夢録Ⅱの散文にしても、変革の意志を表現したものはない。

第二輯にみられる視野の拡大は「荒涼とし

た季節」の寂寞感の容れ物を探し求めた結果であると考えられる。第一輯で限りなく艶麗な幻想世界に遊んだ寂寞の魂が、非常に寂寥としてはいるがやはり落ち着いた美しい気分の中を泳いでいる。それが第二輯の世界である。何其芳は故郷の柏林の体験の後では、無邪気な恋愛の幻想に感情移入を続けることができなかった。それに年令もあるだろう。成長した彼の心にはより落ち着いた第二輯の世界が居心地よかったに違いない。

この時期何其芳は『画夢録』所収の散文を書き始め、純粋に独立の創作としての抒情的な散文の完成を期したが⑰、それは「行を分けない文体が私の憂鬱と無気力を表現するのにずっと具合がよい」という認識に基いていた。第二輯では「荒涼とした季節」の寂寞感を表現する手段として、その感情にふさわしい題材が求められたのである。しかし動機はともあれ、狭小な恋愛の世界から踏み出して夜の街の物音に耳を澄まし、古都の光景を眺め、

現実に生活している人々を見始めたことの意義は大きい。その道を歩み続けるならば、自分の心や、まして「幽霊」の嗚咽ではなくて、「労苦する人々」の呻吟を聞くことも可能となるはずだからである。他方、何其芳は「昔の静けさと透明」に戻りたいと願ってもいた。『刻意集』巻四の第三部分所収の詩はそういう情緒に彩られていると言える。

「夜景(二)」を訳出しておく。(三四年四月一六日の作)

下弦の夜の青い霧の中。

（君がこの町のよそ者でなかったら、道で間違えて人に挨拶するだろう。）

馬蹄の音が寂しく絶えかけ、

剝げ落ちた朱門の前に停まった。

半月のうす黄の光のもと、

臆病な手が自分で車の戸を開き、

黒い影を落として、

門の銅環を探り当てた。

コッコッと響く臆病な音。

（君は彼の定かでない運命を想像しているのだろう。

道楽者が、

半生の歓楽を投げ捨て、

老いぼれて落ちぶれた家に戻って来たのか。

腕に自慢の豪の者が、

年老いて帰るあてなく、気落ちして

わずかな身内にはるばると身を寄せたの

か。）

またコッコッと高鳴る銅環の響が
門内の凄涼な沈黙に詰問する。
（君はその定かでない運命が恐いのか？）
ゆっくりと怒った驚きの音がして、
剝げ落ちた朱門が半分開き、
その黒い影を入れて、また閉まった。
（君を世界の外に閉め出した。
君はまるで奇妙な場所に踏み入り
茫然と訳けも分からずに歩き去ったかの

ようだ。）

馬蹄の音が寂しく遥かに……

（君はいま知ったただろう、なぜ
黄昏どきに鳥が忙しくはばたいて飛ぶの
かを。
空が真っ暗になって林の中で
巣を見つけそこなうのが怕いから。）

何其芳はこの時期「忍耐強く書き続けた。

しかしますます枯渇を感じた」と回想しているが、とうとう「まるまる一年沈黙して過ごした」⑱。作品でみると、詩は「風沙の日(二)」(『画夢録』)が三五年春に、散文は「静かな午後」(『刻意集』)が三五年七月二七日に書かれて以来、散文は「鳴咽する揚子江」(『還郷日記』)が三六年九月二日に、詩は「送葬」(『預言』)が三六年十一月八日になって書かれる。もっともこの間何其芳は、『燕泥集』『画夢録』『刻意集』をまとめていて、『画夢録』の「代序」(三六年二月二二日)、『刻意集』の「序」(三六年五月二七日)「燕泥集後話」「夢の中の道」(共に六月)を書いている。「代序」は特に幻想的に美しく書かれているが、これらは全て自分の思想、文芸観の歩みを振り返り総括したものと言える。

三五年夏北京大学を卒業した何其芳は、中学教師として天津へゆく。「始めて自分の労働をパンに換えた」何其芳は「生活の恐しさを感じ始めた」。そこは学校というよりは卒業生

を大量生産する近代的工場というべきものだった。臭い河の傍らの、都市から流出した汚物に満ちた窪地には、貧窮に喘ぐ人々が棺桶を捨ててゆき、それを野犬があさっていた。黄昏時、工場から帰る少女工の群れを眺めると、何其芳には、「美しい温かい夢を見つづけることはもうできなかった」。彼は「資本主義の罪悪を語り始めた」。それは「個人主義者の怒りを帯びた批判」であった。そのとき学生運動の波が伝わってくるが、学生と「同じく若く、

同じく情熱的」であるのに、もはや学生ではなく第三者の立場の被雇用者として、遠くから眺めていなければならない自分に、何其芳はみじめな思いをする。学生に同情した彼は、ついに解職されて山東半島中央にある萊陽県の師範学校に移る⑲。

何其芳はこの萊陽を思い出すたびに感謝の念を持つと言う。「そこで私の反抗する思想はようやく果実のように熟した。私はようやく、誠実な個人主義者は自殺するのでなければ、

その孤独と冷淡を捨てて大衆に入ってゆき、闘争に入ってゆくしかないと悟った。私はよくよく、世の中の不幸はほとんど人間の手が作ったものだから、人間の手で打ち毀せるし、そうしなければならないことをはっきりと悟った」[20]。彼がそこで眼にしたものは「模範県」の農民の困窮であり、質素な生活に甘んじながら、知識欲旺盛で政治に強い関心を持つ師範学生が、救亡宣伝をして逮捕される現実であった[21]。

この年の夏休み（一九三六年）に彼は故郷に帰って来るが、その紀行集が『還郷雑記』[22]である。「嗚咽する揚子江」には、揚子江を遡り四川に帰る船旅の様子が語られている。四川省の入り口にある巫峡の絶景にさしかかると、船客がしきりに感嘆しているところが何其芳は、その船客を巫峡の山の中に放り込んで生活させたならば、飢餓に満ち、幸福の光の射し込まないその土地を呪って泣き叫び、少しは利口になるだろうと考える。彼の感情は

これほど変化していたのである。彼にはもう周囲の現実から眼をそらし、自分の感情の世界に閉じ込もることは不可能であった。

『還郷雑記』を書きながら彼は驚く。彼の「感情が図太くなってきた」ことに気付いたのだった。それは『画夢録』の凝った幻想的なものとは全く違ったものであった。彼は考える、「図太くなったのもよかろう…略…感情を古代の美女の腰のように細く締めつけることはない」[23]。そして彼は歌声を鞭に変えようと

決意することになる。『預言』最後の詩「雲」は次のような詩であった[24]。（三七年春の作）

「私はあの雲が、あの飄（ただよ）う雲が好きだ…
…」

ぼくは自分をボードレールの散文詩のなかの

あの、物憂げに頭（こうべ）を揚げて
空を望む異邦人（エトランジェ）だと思っていた

ぼくは田舎へ行った

農夫たちは正直のために土地を失ってい
た
彼らは一組の農具だけが家だった
昼間、彼らは畑へ行って零細な仕事を求
め
夜間、乾いた石の橋を寝床にしている
ぼくは海辺の都市へ行った
冬の日のアスファルトの路上には
別荘が立ち並んでいた

それは街頭に立ち並んで春を鬻ぐ女のよ
うに
夏の日の嬌笑と
嫖客の荒淫と無恥とを待っていた
これからぼくは、うんと議論をするのだ
ぼくの願いは茅葺きの屋根をもつことと
雲を愛さず、月を愛さず
星をも愛すまい

2. 成都

「うんと議論」し、文字を武器に闘い、レールモントフの詩にあるように、自分の歌を鞭に変えようと何其芳が決意したそのときに、抗戦がやって来た。彼は四川に帰って師範学校の教員になり、やがて成都に出て雑誌の発行人になる。しかし抗戦の意気に燃える何其芳の眼に映るのは、周囲の無気力な腐敗した姿であった。彼は雑文を書いて周囲の暗黒を批判する。読経の流行、婦女蔑視と児童虐待

の封建思想、青年の頭脳を麻痺させる陰謀、知識分子の出世主義を彼は批判した。成都で書かれた雑文は『星火集』第一輯に収められている。それらを具体的に見てみよう。

「工作について」は、戦時後方服務団の訓練を学校がいかげんに誤魔化してしまったことを批判し、たとえ失恋したためであっても、もよいことなのだと言って、抗戦の訓練を受けるために陝北に向かう若者を擁護し、「工作に地域性はない」と言って若者を引き留めよ

うとすることが間違っていると指摘する。また抗戦に熱心な何其芳を、周囲の人々が「悲観論者」と嘲笑したことも述べられている。一方、抗戦に一層切実で有効有利な仕事があるならば、文学工作を捨てても惜しくはない。けれどもより適切な武器を手にするまでは、文学を放棄する必要はないと述べて、文学によって抗戦に貢献しようという決意を表明する。そして何応欽将軍が背水の陣を布いて決戦の準備をしていた塘沽協定締結の前夜に、

疎開させられて北京を離れたその晩に、「馬蹄の音が、孤独に憂鬱に、沈黙した街に小さな白い花のように撒かれている……」という「画夢録」の「黄昏」を書いていたことを反省している。さらにフランスの象徴派詩人バレリーが「年若い運命の女神」を発表したときに、ヨーロッパ大戦よりも重要な事」と絶讃したことを、ヨーロッパ大戦では三千万人が死傷した、三千万の生きた人間は五百行の詩はおろか、五千万行の長詩よりも

尊いのだ、と鋭く批判した。

「本位文化について」は、儒家思想に基く中国固有文化復活の提唱を批判している。何其芳は中国文化は「人」の観念を欠いており、儒家思想は「個人」をないがしろにすると言う。そしてロマン、ロランと同じように、個人主義者の短処と軟弱無力を痛感している誠実な知識分子がいる一方で、個人を軽視する儒家思想が依然として有力に存在し続けていることが、中国民族の二重の悲劇であると述

べる。さらに敵軍占領下の民衆が反抗せず、民気が消沈しているのは、一千年来の専制政体下の順民訓練の結果であるとし、東方であれ西方であれ人間はみな人間である、「人類の文化」を持たなければならないと結んでいる。

「子供を救えについて」は、子供が大人の感情発散の対象にすぎず、大人もまたこの社会で不幸を耐え忍びながら生活していると述べるとともに、読経教育が学生の時事問題への関心を麻痺させていると批判する。「人力車

に乗って感有り」では、人が人を引っ張り、人が人を指ぐというような現象はもう見たくないと言い、「家族主義について」では、過去の遺物はもはや役に立たない、過去の繁栄に恋恋としたり現在の衰弱を恥じたりせずに、地道に努力を重ね新しい文化を築こうと呼びかける。第二輯の「某県見聞」には、厳格な禁毒条例を尻目に蔓延するヘロイン、壮丁狩りにまつわる腐敗が語られる。第三輯の延安で執筆された「飢餓」には、食堂で客がこぼした食物をあさる子供たちの姿が描かれている。

やがて何其芳に転機をもたらす重大な事件が起きた。北京で開かれた「更生中国文化建設座談会」に周作人が出席したニュースが伝わったのである。「周作人等敵に下る」「周作人漢奸となる」などの見出しで各紙が報道した。何其芳は『星火集』第一輯所収の「周作人事件について」「周作人を書いて」、周作人を厳しく批判する。「周作人

事件について」は、周作人の「日本管窺」は日本軍閥の醜悪を強調していないこと、周作人はナチスとソ連共産党を同じ穴の貉と見做していることを述べて、長期間の、時代とも大衆とも遊離した生活が彼をボケさせて、漢奸に成り下がらせたと指摘する。「周作人事件に関する一通の手紙」では、周作人の、人類と中国民族の前途に対する悲観、不信、青年の奮闘に対する冷淡、嘲笑、完成された趣味主義、世故にたけ悶着を嫌う生活態度を非難

して、人にはみな光明の面と暗黒の面とがあるけれども、どちらの面が重要なのかを見定めなければならない、と言って批判の手をゆるめない。

何其芳の周作人批判は、過去の自分との訣別の再確認という意味を持っていたので、何其芳は必死であっただろうし、それだけ余計に容赦のない批判になったと考えられる。整風運動を経験した後に何其芳は、魯迅逝去六周年を紀念して「二種類の異った道」①を書い

ている。

この文章は副題の示すように、魯迅と周作人の思想発展上の分岐点について略述したものである。その中で何其芳は、周作人の思想の本質が個人主義と趣味主義にあること、周作人が芸術にはそれ自身の目的、すなわち個人の感情を表現することがある、と強調したことを言う。個人の感情を表現することとは、抗戦以前の自分の文学観は「自分を書き、自分の幻想、感覚、感情を書くだけのためのもの②」というものだったと自己批判し

ているように、まさしく何其芳自身の文学観でもあった。何其芳はそれを捨てようと決意して成都にやって来たのであった。また周作人が、当時の中国では平和な恬淡とした文章を書くのが難しいと嘆いて、彼の心境がこれ以上粗雑で荒れたものにならないように祈ったことを述べているが、何其芳はかつて『還郷雑記』を書き続けるうちに、自分の感情が図太くなって来たのを感じ、それを肯定したのであった。

「事実が我々に語っている。あのすこぶる〝幽雅〟で消極的な個人主義、趣味主義から出発したときに、一人の知識分子がどこまで堕落するかを。坂をころがる石のように、どん底まで落ちなければ止まらないのだ」。さらに周作人の芸術に対する見解、生活趣味は、小資産階級出身の知識分子には理智的には批判できても、感情的には魅かれやすいものである。そこで何其芳は魯迅の道、「執拗に集団のために戦う者は必ず集団

とともに前進してゆき、その属する集団に永遠の将来と光明の将来とがあることによって」不朽となった魯迅の道が、自分の進むべき道であると結論を下す。もちろんこの文章は整風運動の後にその経験に基いて書かれたものであるが、「成都で周作人批判をしたときにも、これほど明確に整理された形ではないとしても、以上のような点をおそらく漠然と感じていたのではないだろうか。

ところが、何其芳の周作人批判に対する周

囲の反応は冷たかった。何其芳はその批判が苛酷だ、怒りの度が過ぎると非難されて、非常な寂寞を感じる。そのとき友人が手紙を寄こして、自分は周作人に対する好感と敬意を捨てる、君はもう個人主義者と自称すべきでない、なぜなら君には仲間がいるのだから、ただし他の場所にではあるけれどもと言って来た。そして何其芳は延安にゆく決心を下す。

何其芳は成都では詩を書かずにもっぱら雑文を書いていたが、周作人批判に対する周囲

の冷たい反応に失望して、自分を励ますかのように「偶然の例外」③である詩、「成都よ、おお前を揺り醒まそう」を書き上げる。（三八年六月）。この詩は何其芳の第二詩集『夜の歌』の最初に収められる。「ここたしかに大きくてにぎやかな北京がある。しかし私の北京は小さく静かだ」という工ロシェンコの句を引いて彼は歌い始める。

一

成都は荒涼として小さく、

無数のふしだらな夜を過ごした人のように

に

睡っている、

街をねり歩く炬火が燃えたのに、

凄まじい警報が鳴ったのに、

一船ごとに子供たちが、

あちこちの戦場から後方に運ばれて来て、

祖国だけが彼らの父母となったのに、

敵は昼夜の別なく広州、

我々の唯一の海への出口を爆撃している

のに、

万里に連なる新たな長城は

前線の兵士の血肉であるのに、

私はエロシェンコのように

悲しく嘆息せずにいられない。

成都は睡っているが、

人が睡れる場所ではない。

それに人が睡れる時代ではない。

……略……

そこで敵は我々の北平、上海、南京を奪い去り、

無数の都市が蹂躙の下に呻吟している、

そこで誰もが個人の哀楽を忘れ、

全国の人民が連なって鋼の鎖になった。

長い鋼の鎖の中で

私はとても小さなひとつの環だが

私は最も頑強であるかのように頑強だ。

盲人の眼がとう開いたように、

暗黒の深部から私は光明を見た、

その巨大な光明よ、

私にやって来い、

我が祖国にやって来い！……

三

しかし私は成都にいる、

ここには享楽、懶惰の空気があり、

口ーマ衰亡時代のように美食に凝る、
そのうえ汚穢、陳腐、罪悪が、
その貪欲な腹を満たしたので、
それは陽光の輝く朝にまだ睡っている、
……略……
成都よ、お前を採り醒まそう、
この陽光の輝く朝に！

3. 「夜の歌と昼の歌」の時期について

「私は前線へゆくべきだ。たとえ兵士たちと一緒に敵を射てなくとも、彼らとともに生活し、彼らの物語を書きにゆくべきだ。こうすれば私自身の恥しさを少しは和らげることができるし、また後方で快適な生活を送っている先生方に考えさせることもできる。彼らがあのいつでも命を犠牲にしようとしている兵士たちのことを、頭に血が上っていると

か、怒りの度がすぎると嘲笑するかどうか見てやろう」①。何其芳はこういう決意を持って、川陝公路を北上して延安の城門をくぐる。三八年九月のことである②。

延安は何其芳の抗日戦への情熱を充分に満足させる土地であった。彼は延安の「自由な空気。寛大な空気。快活な空気」に感激した。城門は一日中開かれていて、荷物を背負い希望に燃えて各地からやって来た青年たちが、学習し、歌をうたい、緊張した快活な日々を

送っている。やがて一隊ごとに軍服に身を包んで、情熱に燃えながら各地へ散ってゆく。

困難はある、けれども物質生活は一年前より大きく進歩しているし、皆緊張して快活に仕事に励んでいるから、物質生活の些細な困難は、厚い羽蒲団の下の豆粒のようなものであって、伝説中のお姫様でもなければ寝苦しいことはない。□西行漫記□（□中国の赤い星□の中国訳）を読んだときに③、延安の人々は生活が苦しいから喝うのだと考えたが、本当は楽

しいから唱うのだ。④

何其芳の延安を肯定する心情はその後も変わらずに一貫している。彼の詩には各所にその心情が歌われるし、散文にも「我々延安で生活している者は楽しい」⑤、「生活に光明と快楽が満ちているので、時間が柔和な歌のように容易に迅速に過ぎてゆく」⑥といった言葉が見られる。

ところが、何其芳が延安のこうした空気になんの屈折も経ずにすんなり溶け込めると楽

観できたのは、ほんのわずかな期間にすぎなかった。この年の十一月、何其芳は同郷の作家沙汀や魯迅文学芸術学院の学生たちとともに、賀竜の率いる一二〇師へ従軍する。前線に出てルポルタージュを書くという所期の目的の実現に、彼は熱い期待で胸をふくらませていた。しかし現実の前線には、彼が想像していた味方の勝利の劇的な光景などはなくて、あるのは敵の大掃蕩であり、苦しい夜行軍の連続であった。

司令部で話を聞いているばか

りではしようがないと、政治部の工作に参加するが、結局お客意識を捨て切れずに兵士たちと溶け込めない。やがて「前線にも寂しい日がある」という句が頭に浮かぶようになり、前線にいてもしようがないと考えるようになった。そこで作品を書くには時間をかけた沈澱が必要だ、前線ですぐに書くことはできないという理由をつけて、翌年七月に延安へ帰ってくる(7)。

整風運動を経験した後で何其芳はこの経過

を失敗、羞ずべき退却、困難を恐れて逃げたと表現して、自己改造の問題を認識していなかったと反省する。しかし当時の何其芳は失望し落胆は味わったが、それほど深刻に失敗、退却と意識することはなかったと思われる。彼にとって延安は依然として「生活に光明と快楽が満ちているので、時間が柔和な歌のように容易に迅速に過ぎてゆく」所であり、「思想が遅鈍で感情の脆弱なこの私は、環境、人間、工作からたくさんのものを学び、かって

なかった迅速な進歩をし、完全に私の過去のあの不健康な、不快な思想と告別して、小さな歯車が巨大な機械の中で、その他の無数の歯車と同じく、快活に規則的に回転している」⑧と感じていた。何其芳自身が回想しているように、それは創作上の問題として認識されていた。ルポルタージュが書けないことに彼の失望の主な原因があった。彼が前線で書いたルポルタージュ「日本人の悲劇」一篇のみであり、他の三篇は延安に帰ってから書かれ

ている。

さて、延安に戻ってからの何其芳は、これ以後「文芸講話」の行なわれるまでに、散文、長詩、短詩を書くが、以下それらの作品について見てみよう。

ルポルタージュ四篇は『星火集』第二輯に収められている。日本人の非人間性を告発した「日本人の悲劇」、日本軍占領地から脱出してきた小学生との会見記「あ

る大原の小学生」、従軍中に見聞した八路軍と大衆との心からの結びつきを描く「人民と軍隊」、大青山根拠地を建設した七一五連隊を讃える「大青山の七一五連隊」の四篇である。

どれも抗戦の気分を高揚させるものである。

これらについて何其芳はのちに、生活に深く入り込んでいないし、という根本的な欠点と、普通の記事文で済むものをわざわざ凝ったルポルタージュにした形式主義とを自己批判している。[9]

従軍と四篇の書かれた経過、それに当

時の自分の心情を反省した自己批判であろうが、作品としてのこの四篇にはそれほど顕著な欠点があるとは思えない。

「星火集」第三輯には少年期から延安にやって来るまでの心の遍歴を書いた「ある平凡な物語」を初めとして、散文五篇が収められている。これらの散文についても、何其芳はのちに自己批判している。まず小資産階級の観点でもって無産階級の観点に代えたりこじつけたりしたこと。その顕著な例として、ゴ

リキーの偉大な点は口マン・口ランの言ったように、彼の仕事が下層民衆と緊密に結合していたことであるのに、「ゴーリキー紀念」では非常に抒情的な筆調でゴーリキーの善良、楽観について述べ、それに鼓舞されると述べたことをあげる。また感動的に書けた文章で、文意も良いと自認する「飢餓」に描かれる自分の見る夢の内容が、労苦する人民との本質的な違いを説明していると指摘する。第二点としては、個人から出発した思想感情を反復し

て論じていることを自己批判する。「快楽」「過去」「個人の問題は適切に処理されなければならない」等々は、当時の自分が「憂国憂民」ではなく「憂己憂私」であったことを証明している。「土地の塩について」はこの問題を取り上げたのだが全く不徹底で消極的であった、当時は知識分子が適切に個人の問題を処理して、面倒を起こさないよう希望するということを主に考えていただけだったと言う。最後に思想方法の上で抽象的に問題を見ていたこ

とを自己批判する。その例として「ゴーリキー紀念」で「人間――が世界の枢軸だ」という言葉を引用したのは、自分自身の抽象的な人間という観念と合致したからだと言って、世界の枢軸は抽象的な人間ではなく労働者であると言う⑩。

何其芳が延安で書いた詩は字句の修正、削除等はあるが、かなりの数が詩集『夜の歌』⑪に収録されている。この時期の詩は

大きく三つに分類することができる。いわゆるスローガン詩的なもの、「夜の歌」の連作と類似の詩、一連の短詩の三つである。抗日戦、革命を讃え鼓舞するスローガン詩の存在は、何其芳が延安で書いた詩の最も重要な特徴である。「ある左官屋の物語」「我々の歴史は駆けている」「楽しい人々」「叫び」「『北中国は燃えている』『断片(一)』「革命――旧世界に向かって進軍せよ」「我々の叫びを更に鋭く」と続く詩がそれである。その中で特に躍動的な「革命

―旧世界に向かって進軍せよ」は次のような句で始まる。

革命―旧世界に向かって進軍せよ！
暗黒の偶々に向かって進軍せよ！
崩壊寸前の階級社会に向かって進軍せよ！
郷紳とゴロツキの聯合統治に向かって進軍せよ！
軍せよ！
監獄に向かって進軍せよ！
砲弾を飛ばしている陣地に向かって進軍せよ！

ときには必要のために、革命は秘かに地下を進軍する！
ときには必要のために、革命はあからさまに進軍する！
ときには革命はうしろに一歩退却する、前に十歩挺進するために！

続けて革命の炎が旧世界を焼き尽くそうと
している ことを歌い、一九二七年の輝かしい
記憶とそれに続く屠殺、鎮圧を歌い、血肉の
身体で革命の大道を敷きつめた人々を讃え、

中国の暗黒が結局は滅びるものであることを
歌、たあとで次のように終わっている。
革命——我々に幸福を持って来い！
我々を自由に呼吸させろ、
我々に歌でもって咒詛と慟哭に代えさせ
ろ、
我々に感じさせろ、こんなに大きな国が
本当に我々のものなのだと、
我々がこんなに肥沃な土地を本当に使え

るようにしろ、
我々に充分な食料を持たせろ、
我々に着つくせない布を持たせろ！
我々は知っている、自然が我々にあらゆ
る必需品を供給できることを、
世界はもともとこんなに美しいのだとい
うことを、
人と人の間にも親愛な関係を築けるのだ
ということを、

我々は知っている、なぜ我々がいまこんなに貧困なのかを、

なぜ我々が今もなお平和と幸福を持てないかを、

我々はなんでも知っているのだ！

革命――進軍せよ！

我々はぴったりとお前について前進する！

「叫び」も「叫べ、叫べ！」と書き出し「あなた方人類の未来のために闘争している人

よ／私はあなたとともに叫んでいる！」と歌う勢いのよい詩である。「□北中国は燃えている□断片(一)」は「嵐県城」「空襲」「進軍」「滹沱河」の四部分からなり、前線で見聞した英雄的な行為を感動的に物語っている。「我々の叫びを更に鋭く」はソ独戦争の勃発を歌ったものである。

「ある左官屋の物語」は農業のあいまに左官をしている農民が、日本軍に妻子を殺され八路軍に投じ、日本軍に焼き殺されるとい

う筋の叙事詩である。しかしこの詩は、村を日本軍に襲われて妻子を殺された左官屋が、「遊撃隊に参加するしかない！」と決意するところまでを語り手になっている同志が話し終えると、聞き手になっている作者が「ありがとう、感動的な話だった／このごろぼくは少し涙もろくなっている」という書き出しで、昼間は積極分子である自分が、今は他の男を愛している昔の恋人を夢に見る、どうして愛はかくも屈強なのか、この夢は自分を不愉快

にするのだがこんな夢にも責任を負うべきなのか、と語る部分が挿入されている⑫。そこで「私の物語はまだ終わらない」と作者をさえぎって、遊撃隊の通信班長になった左官屋が日本軍の捕虜になり、残酷な拷問を受けながらも口を割らず、とうとう焼き殺されてしまう。その晩、左官屋の雄々しい姿に感動し心に恥じた五十人の保安隊員が、町を脱出して八路軍に身を投じて来るという結末を語る構成になっている。

「我々の歴史は恥けている」は、経済的に恵まれているという理由だけで、放蕩息子と結婚させられて性病で死んだおばと、親の決めた許婚者を捨てて逐電した相手の男に、結局捨てられて不幸のどん底に落ちた姉の友だち、という二人の女の不幸な物語を語ったあとで、

私は歴史があの過去を運び去ってくれるのを喜んでいる、

あの沈鬱な不愉快な過去を、

！！略！！

しかし今度は私が聞く番だ

あなた方があなた方自身の物語をするのを、

あなた方幸福な若い世代よ、

あなた方勝利の叛逆者たちよ、

あなた方自分の運命を支配できる人々よ！

と若い女性同志たちに呼びかけて終わっている。

「楽しい人々」は、多くの青年男女の合唱

と対話の形式をとった革命讃歌であり、各々の過去を背負った青年たちが、力強い合唱の渦に合流してゆくというものである。その中には、ある青年が自分は本当の口マニ派だから手のマメやひび割れた足にも非常な美を見い出すし、詩情を感じると言う。すると我々は口マニ主義者というよりマルクス、レーニン主義者という方がふさわしい、と反論する者があり、それに対して他の人が、彼の言うのにも道理がある、それにあんなに快活な言

い方をしているじゃないか、と発言するやりとりが書かれている。また肺に弾を受けて死んだ弟を悲しむ少女が、私たちは楽しいと言えるのだろうかと問う。すると他の人々が、やはり楽しいと言うべきだ、痛苦は多いがやがては消える、闇夜は長いがやがては昼に代わるからと少女を励ます。そこで少女が、それでは私の歌声を合唱の中に投じよう、そこでは誰も私のふるえ、悲しみを聞き取ることができないし、私の歌声もだんだんと高く雄

壮になるだろうから歌う挿話が書かれている。

このように見てくると、抗戦、革命を礼讃し鼓舞するスローガン詩の系列に属する詩といえるものであっても、何其芳の書いたものは決して単純なスローガンの羅列に終わるものではなかったことがわかる。自分の記憶に深く刻み込まれた過去の歴史の残酷、悲惨の追想は、未来の光明への希求をいっそう熱烈なものとする。また雄壮な革命の怒涛に溶け

込み切れない面、不調和な音の告白は、革命の高まりに水をかけるということも確かにあるが、他方その誠実さが好感をもって迎えられることもあったにちがいない。特に知識分子にはそういうことがあったのではないだろうか。この系列の詩はあくまでも抗戦、革命の礼讃、鼓舞が前面に押し出されているものであったが、それでもそこかしこに詩人何其芳の特徴である、個人の心に関わる問題が顔を出していた。この個人の心の問題、自分の

心情をいっそう明確な姿で持ち出してきて、中心テーマに据えたと言われているのが、「夜の歌」の連作等の作品である。短詩形で書かれたものもこの傾向が強かった。

「夜の歌(一)」⑬は『聖書』「雅歌」の一節、「私の体は睡っている、しかし私の心は醒めている」を引用して書き始めている。

そして私の頭は開かれた窓だ、
そして私の思い、私の群がる雲は、

私に向かって入り乱れて飛んで来る、

そして五月、
昼は素晴しい陽光があり、
夜は素晴しい月がある、
……略……

「しかし、何其芳同志、あなたは自然が好きでないと言ったのに、なぜあなたの本の中で自然をあんなに美しく描くのか？」

そうだ、私は自然を語らなければならない。

私はいつも自然を背景、装飾にした、
……略……
なぜならば自然よりも、
私はもっと人類を愛しているから。
……略……
そして私は戦争を語らなければならない。
……略……
私は知っている、彼らがじきに目覚め、

帝国主義の戦争を別の性質の戦争に変えることを。

そして死滅の中から、
新しいヨーロッパ、新しい世界が生長することを！

と歌ってくるが、続いてレーニンの言葉を引用する。

「私は田舎で仕事をしている同志に手紙を書いている。
彼は寂寞を感じている。彼は疲れている。

私は彼を慰安せずにはいられない。
心は決して小さな事ではないのだから。」
……略……
「我々には夢想が必要だ！」
そうだ、私はささやかな仕事をするのが
こんなに好きだ、
しかもまた夢想するのがこんなに好きだ、
私はこんなに快活に私自身が好きだ、

しかもまたこんなに苦しんで私自身を突
き破り、
私自身を高めたい！
「夜の歌(二)」は、「私の兄弟よ、お前はなぜ泣
くのか？／なぜ生活がこんなに美しくないの
かと泣いているのか？」と書き出して、生活
の美しくないことがらを列挙してから、
そうだ、もっと多くの美しくないこと、
もっと大きな美しくないことがまだ
ある、

そうだからこそ、我々は革命の隊伍にや
って来たのだ。
……略……
お前は言うのかお前も見たと？
暗黒を通り抜ける光明、
痛苦を通り抜ける快楽、
死を通り抜ける新生、
醜悪を通り抜ける美麗を、
……略……
それならばお前はなぜまだ泣くのか、愚

かな子よ、
お前は自分の軟弱、愚昧を泣いているのか？
手で涙をぬぐえ、
光明の物語をしよう、
楽しい物語を！
と終わっている。「夜の歌(三)」は、子供たちの中へ入ってゆこう、労働者の中へ入ってゆこうという詩である。そこでは、

私はもう一人の大人だ。
私には多くの責任がある。
けれども私は十九才の少年のように
あたたかい心が必要だ
と歌われるのであるが、結局、
私は灯りをともし
私の机の前にすわって
学生たちの答案をみるか
手紙の返事をかくか
本を読むか

明日の仕事のことを考えよう
要するに
それが私のなすべき仕事なのだ。⑭
と自分に言いきかせた形で終わっている。「夜の歌(四)」は、延安に向かうトラックの中で知り合った女性同志に対する恋愛感情を歌ったものである。
まさかこれは情歌ではないだろう。
私は違うと思う。
たとえそうだとしても

あのブルジョア社会のものとは大いに違
うだろう、
……略……
私はこれまで愛情を
人と人の間の情誼に異性間の吸引が加わ
ったものと見做していた。
そして今は、さらに同志愛が加わる。
と言って同志愛を強調するけれども、弁解と
とられてもやむをえないような、まぎれもな
い情歌である。この詩は自分の心の問題にこ

だわっている何其芳の姿を最も明瞭に浮かび
上がらせる詩である。「夜の歌(五)」には、この
ような消極的な面がほとんど見られない。ツ
ルゲーネフの「神よ、帰る家のない人々を祝
福して下さい」という祈りを、「祝福」なんか
役に立たぬものだと否定している。そして、
ただあなた方人民の中からやって来て
断固として人民のために仕事している人
のみが
詩や歴史によって

功績と名前を頌えられ、記るされるに値

いする

と歌っている。

「夜の歌」には何其芳の自分自身の個人的な感情にこだわる面が顕著である。革命陣営にあって、個人ばかりを見て集団を見ることがないならば当然批判されることになるし、彼自身もその点を自己批判している。しかしここであらためて強調されなければならない

のは、何其芳がこれらの作品を書いたとき、その心の根底にあったのは抗戦、革命に貢献したいという燃えたぎる情熱であった、という疑うべくもない事実である。「夜の歌」は『燕泥集』『画夢録』と同じように、自分の感情にこだわりつづけるという何其芳の特質を残しながら、しかもなお抗戦、革命へ邁進するという進むべき道が明白に示されている点で、全く違ったものであると言える。

整風運動の後に何其芳は次のように自己批

判している。

この時代この国に起きたいろいろな事件、人民と彼らの受難、覚醒、闘争、彼らの完成した英雄主義的な功績で、私の詩に残されているものがなぜこんなに少いのか。それは轟々たる歌と涙の世界だ。それなのに私の歌声はこの世界で、なんと無力でなんと不調和に見えるのだろう！⑮

ところで彼はまた、次のような注目すべき事実をも書いている。

今でも覚えているが、当時でも少しは自らを知る分別があって、私は私の感情が相当古く、新しい生活も深くは知らず、詩を書くのもあいかわらず困難だ、ということを理解していた。しかしそこで私は一歩譲歩してしまった。私自身の、この新旧矛盾する感情を書くことにも意義があると私は考えた。こうして主に個人を書くという傾向に⑯たちまち戻ってしまった。

結果として個人主義的傾向に後退してしま

ったことは批判されて当然であった。しかし、当時彼はなぜ新旧矛盾する感情を書くことを有意義だと考えたのだろうか。少くとも「夜の歌」が消極的な作用を起こすものだとは微塵も考えていなかった、ということは推測できるだろう。つまり何其芳は、自分が抗戦、革命への道を突き進んでいることを固く信じていたのだった。彼は延安で再び詩を書き始めたときは、とても容易に速く書けた、昼間仕事で忙しくても、夜や明け方に感じたこ

とをたちまち書き上げたと述懐している。それは「夜の歌」等の詩が、かつて彼の習熟していた自分の心情を歌うものであったこともあるけれども、やはり重要なのは、何其芳がこれらの詩を書くことに対して、全くうしろめたさを感じる必要がなかったということであろう。「ある平凡な物語」には、「画夢録」と延安の間には大きなへだたりがあるが、一本の通じる道がないわけではないと書かれている。おそらく何其芳は、大きく回り道はした

けれどもとうとう延安にたどりついたことを自負していたにちがいない⑰。そういう経歴をへていまの自分があるのだ。だから「我々の歴史は駆けている」のように、過去の悲惨を思い起こすことによって新たな決意を生み出すこともできる。そして何其芳は古い感情をも含めた丸ごとの自分のままで、革命の陣営に役割を探し当て、分相することができると信じていたのだ。従軍の失敗を自己改造の問題としてではなく、創作上の問題と考えたの

もそのためにちがいない。

当時の何其芳は決して、延安で生活することによって「自らの思想・感情がそっくり変革されることを期待するオプティミスティック な心」⑱は持っていなかった。むしろ自らの思想、感情が変革される必要を感じていなかったという意味で「オプティミスティック」であったと言えるのではないか。「嘆息三章」⑲の二番目の詩「L・I・同志に」の中に次のような描写がある。

大通りを食料を積んだ運輸隊がゆく、
ある家畜の首には大きな銅の鈴が掛かっ
ている、
それはが孤独に大声で響いた、
まるで「僕は揺れ動いている、
僕は声を出している、僕は存在している！」
と叫んでいるかのように。
ある家畜の首にはひとつらなりの小さな
銅の鈴が掛かっている、
それが調和して軽ろやかに響いた、

まるで争って叫ぶかのように、
「見て、僕たち小っちゃなものはなんて
愉快なんだろう！」
……略……
一切が活動している。
一切が生長している。
しかし私はひとり河辺の石に坐っている。
私も私にはなにかが欠けているようだと
感じた。
何其芳が感じているのは大衆の合唱の輪に

入ってゆくことのできない寂寞であろう。彼は自分にふさわしい声域を探し当てることができない。力強く抗戦、革命に前進する集団の中で、自分にふさわしい位置を見つけ出すことができずに寂寞を感じているのだろう。従軍中、落馬による骨折でブラブラしていたときに恥しいと感じたのも、抗戦になんの有用な役割を果たしえない自分が情けなかったからであると思う。革命の隊列の中で満足に役割を果たせていないというひけ目を持つ何

其芳には、意気揚揚とした大衆との一体感を味わうことが難かしかったにちがいない。しかし何其芳はまだ自己改造の必要は認識していなかったと思う。整風運動で批判された「知識分子は知識分子を熟知した題材を書けし書くのがいちばん良い」という主張も、革命を推進するのには小資産階級意識を捨てなければならないことを、考えてもいなかったことを示している。何其芳にとって大衆とひとつになれないということは、集団の中で自分

の果たす役割を見い出せないということであった。そして集団の中に位置づけられるために自己改造が必要であることを初めて明確に示したのが「文芸講話」であって、このような状況にあったからこそ、「文芸講話」は彼に大きな衝撃を与えたのであった。

何其芳は文学という武器を手に抗戦、革命に参加しようとした。その決意は、莱陽では「自分の歌声を鞭に変え、この不合理な社会

の背に打ち返してやりたい」(20)、成都では「私は前線にゆくべきだ。」略：彼ら（兵士）の物語を書き、にゆくべきだ」と繰り返えされる。そして延安に到着して間もなく毛沢東と会見した際に「延安を書きたい」と言っている。従軍は ルポルタージュ を書くのが目的であった。かつて「工作について」の中で、より適切な武器を手にするまでは文学を放棄する必要はないと言ったように、彼は革命の陣営で文学の果たす役割を追求していたこと考えられる。

けれども何其芳は結局、満足のゆく文学の役割を見い出すことができなかったのではないだろうか。

私はむなしく骨折りながら私の物語を語った。私はむなしく私の想像に、私の聞いた事実がひとつの広漠とした地域のひとつの季節を駆けるのを追わせた。なぜならば私はお前、若く快活な七一五連隊が、あの濃厚に彩られた地方で、偉大で困難な任務を完成したときに経験した感動的な戦闘、

事件と日常生活を、ほとんどなにも描き出さなかったからだ。実際の行動に比べて歴史がどんなに貧弱で味気ないかを、私は初めて知った。生きた事実に比べて伝説がどんなに拙いかを、私は初めて知った。生活のそのものに比べて想像と推論がどんなに色褪せたものであるかを、私は初めて知った。

物語の伝え手として成功するよりも、私は生活の中で失敗する人物になりたいのだと

いうことを、私は初めて知った。㉑

何其芳が延安で書いた作品は必ずしも失敗ではなく、むしろ相当の成果があったと言える。ただその効果は、成都で書かれた場合と延安で書かれた場合とでは全く違っていたのではないか。それは成都と延安の現実の相違に由来する。成都で彼が眼にしたのは腐敗堕落であって、彼は暗黒暴露に努めることで充足感が得られたのではないだろうか。ところが延安では大筋においての欠点は見い出せない。あってもそれは厚い羽蒲団の下の豆粒

にすぎない。」川陝公路を延安に向かう車中で何其芳は、バーナード・ショーがソ連を去るときに言った、「私が依然として批評の自由を持つことを許して下さい」という言葉を頭に浮かべていた[22]。ところが延安に着いた何其芳は「私は延安を歌う」を書いて手放しで延安を賞讃する。しかし讃歌を書いても、それは生き生きと躍動している現実の前では色褪せて映ったにちがいない。

私は文学の革命における作用は大きくな

いと感ぜずにいられなかった。真実そう感じた。そして事実でもあった。[23]

このような何其芳にとって当時可能であったのは、自分の心を歌うことだったのではないか。そうすることによって自分に反映されている中国の一断面を描くことができると考えていたことも、[24]それを励ましたにちがいない。「熟知した題材を書け」という主張も、そういう理由によるものであった。

自分の心情を歌い出した何其芳は、ときには消極に振り切れてしまったような詩を書くことがあった。その極端な例として、「歌六首」[25]の四として発表された「私は小さな口バを見た」を訳出する。「歌六首」はすべて短詩であるが、何其芳はその他にも短詩を書いている。それは長詩は大衆的でないという発想に基いていて、彼なりに大衆化を考えたものであるという。[26]しかし内容の点ではむしろ「夜の歌」に近いものであった。

私は小さな口バを見た、
それはあんなに跳躍し、あんなに喜んで
いる、
乾いたほこりだらけの道は
その蹄の下では一面の草地のようだ、
それは知らない、大きくなったときに、
その背にどんな物がのしかかるかを、
それは世界に来てまだ間がないので、
あんなに多くの新鮮と、あんなに多くの
驚きを見ることができる、

あんなに軽快に跳躍し、あんなに快活に
呼吸できる、
それがどんなに耳を動かすか見てごらん、
この小さなやつを見てごらん！

4、何其芳の詩をめぐる論争

一九四二年五月の「文芸講話」のあとの六月と七月の『解放日報』紙上に、三篇の何其芳の詩をめぐる論文が掲載されて論争が展開された。彼の詩の性格をいっそう明確にするためにこの論争を見てみよう。

まず六月十九日の紙上に呉時韻が「『嘆息三章』と『詩三首』を読んで」を発表する。執筆は「文芸講話」前の四月八日である。呉時韻は何其芳の詩に表現されている心情の軟弱、

消極を厳しく批判した。呉時韻は冒頭に「嘆息三章」の第一首「丁、L、同志に」の書き出しの部分、

憐れな人力車夫が「電車を打倒しろ」と叫んでいるように

私は心底からとても素朴なスローガンを叫びたい

「愛情を打倒しろ」

を引用して、愛情が打倒できないことは誰でも知っている。それなのに「愛情を打倒しろ」

と叫ぶのは、真の階級的を見い出せない人力車夫が、「電車を打倒しろ」と叫ぶのとまさに好一対であり、「人力車夫」に「憐れな」という形容詞をかぶせたことが、作者の心情を余すところなく語っていると述べる。そして、十年間最も自分を苦しめたのは愛情だという何其芳の言葉に対して、十年耐えたのならばもう十年耐えれば済むことであって、いまその苦痛を吐くべきでないと言う。そして、

恋する人は恋のために苦悩する。

恋を持たぬ人は恋を持たぬために苦悩する。

このことは人生がなんと憐れかを心底人に感じさせる

もしも我々が思いつかなかったら

もうひとつの人生を高める名前、革命を。

という詩句については、人生を憐れと観たのならば無理に革命を持ち出す必要はない。不調和であり、なんの積極的意義も持ちえず、かえって虚偽に見える。それはただの嘆息に

すぎないと批判する。さらに、我々の時代の詩人の責任は嘆息することではない、作者自身が寂寞を感じているから、全てのものを寂寞と見做すのだと言う。そして、詩作を心の慰みにしてはならない、苦悩と空虚を増すだけだと言う。

「詩三首」については、何其芳の思想、感情が何其芳自身や読者にとって有害であることを何其芳が理解していない、と最初に指摘している。第一首「私は清らかなことを話し

たい」については、何其芳自身が、愛情を得れば全てが所有され、愛情を失えば自分の活動が停止してしまうと考えるのはどうしようもないが、青年に向かって語るべきではないと言う。第二首「なにが永遠に残るか」では、

人が日光の下でする一切の労苦にいったいどんな益があるのか、

人はあんなに速く揺籠から墓場まで行ってしまうのに？

と嘆いているが、あとで、

私はそこで大きな信念を持った。

そうだ、人の労働だけが永遠に残るのだ。

と言うのは作者の真の感情と調和していないと断じて、もしも信念を持ったのならば、「時間の暗黒」を照らし出すべきだと言う。第三者「なんども私は日常生活を離れた」について、何其芳は地獄の囚人と見做し、人々を地獄と見做している。そこで塵にまみれた世界から逃がれて、大自然の懐に抱かれようとするが、修行僧のような勇気がな

いので、結局地獄に舞い戻って罪人たちと暮らさざるを得ないのだと言う。さらに大衆は詩人に「嘆息」してもらう必要はないし、「悲しい歌」を歌うこともない。兵士が戦場に赴くのは敵に打ち勝つためであって、死にゆくのではないと厳しく批判する。最後に、何其芳の詩の形式、技巧の成功と独特の風格を認めながら、何其芳が「高き」に居りて下に臨むように現実を眺めていて、現実と調和できずに遊離していることは、ちょうど奴僕の

主人が不潔で、粗野で、無智な奴僕を愛していながら力が足りないために、彼らを清潔に、上品に、知識を持たせることができず、苦痛と悲哀を感じるのと同じようなものだと批判して、文を終えている。

七月二日には金燦然「間隔——何詩と呉評」が掲載される。金燦然はまず「北中国は燃えている」の中の「黎明の前」を引用する。

私はかつて迷い人だった。

難破船の乗客が木板にしがみつくように
私はあんなに真剣に夢想と愛情に身を委ねた、
しかし夢想はガラスのように砕けやすく、
愛情も世の中の欠陥を塡められなかった。
……略……
私は運命で定められている、旧世界の輓歌を唱い
新世界の誕生を讃える者と。
旧世界とともに、私は私自身を埋葬する

だろう、

そして楽しく経験する

私の苦痛にみちた再生を。

金燦然は何其芳のすべての詩にこの新旧の世界観、人生観の二重性が表現されていると言い、しかも新が旧を克服しつつあると言う。

「愛情を打倒しろ」についても、何其芳は革命の偉大さに感激して、虚弱な愛情の木板が革命闘争の烈火の中で焼かれるのを、胸を躍らせながら見守っているのだと言う。ところ

が、何其芳は「己を捨てて社会の為に」という精神を持ちながら、ナロードニキがそうであったように労働者、農民と間隔がある。辛亥革命、大革命、ソビエト運動を経て、自覚し組織されて巨大な力量となった労農大衆が、何其芳の詩の中では人の助けを待つ「憐れな奴」としか描かれていない。こういう現実との間隔が彼の消極さを生む、と金燦然は言う。何其芳の心は矛盾に満ちている。現実を愛しているが、また現実の狭小を嫌っている。労

働者、農民を愛している。彼らとある距離を保っている。進歩的な力と遅れとが激烈な闘争をしているというのである。だから何其芳の詩は一部の青年同志の偏愛するものとはなっても、「新世界の誕生を讃える」ことはできないと述べる。また呉時韻の批評については、消極面についての批判は何其芳が参考にするべきだと言うが、批判の方法が枝葉末節にこだわって、都合のよい所だけ引用して論じているのは、何其芳の光明面を抹殺することになり、「病を治して人を救う」方針に反している。

七月十八日の紙上には賈芝「何其芳同志の六首の詩を略談する――呉時韻同志の批評から論じ始めて」が掲載される。賈芝は呉時韻の批判を一方的なものであると言い、「画夢録」以降一貫している自己を突破し、不断に進歩を求める何其芳の精神を無視して、「嘆息」や「悲愁」ばかりを許える悲しい歌であると曲解していることを厳しく批判する。

そして呉時韻の解釈の誤り、一方的な批評に具体的な反論を加えている。しかし同時に、何其芳の詩の欠点は小資産階級意識に由来し、大衆の積極的な面の評価ができずに寂寞を感じるのだと言う。そして、ところが何其芳にはそのおしむ気持ちがあり、その意識をいとおしんでいることを鮮やかに表現している。

何其芳の回憶を好むことが、その意識をいかから批判しても徹底した批判にはならない。意識を徹底的に認識していない面もある。だ

けれども心の空虚を填めるには、仕事や認識によって小資産階級特有の意識を改造しなければならない、と何其芳を批判する。最後に何其芳の詩の読者が、小資産階級意識のこびりついた知識分子に限られていると指摘する。彼の詩は自分の心理を解剖してみせるが、労農大衆はそんなことに興味はなく、彼らを啓示してくれるもの、彼らの知恋している生活、人物に関心があるのだ。したがって「熟知した題材を書けば」という主張も、自分自身の狭

い殻に閉じ込もることではなく、熟知していとによって、それを熟知したものに変えることが必要なのだ。」大衆のために、どうするかという書くか」ばかりでなく、「なにを書くか」の問題なのだと述べて終わっている。

以上三論文を見てきたが、呉論文が何其芳の消極面を一面的に取り上げて完膚なきまでに批判しているのに対し、金、貫両論文は、

何其芳の詩を新旧両意識の矛盾闘争する姿が表現されたものとみて、その消極面は批判するが、同時に自分を高めようとする努力を激励している。ただ貫論文の呉時韻の批評に対する批判にはかなり厳しいものがある。なお金論文が六月二五日に、貫論文が七月十一日に執筆されていることと、貫論文の最後に、何其芳一人の問題ではなく、すべての小資産階級出身の作者と著作を学んでいる者の努力の方向の問題だと述べていることから、整風

運動の中での知識分子に対する態度が、函論文から伺えると思う。また何其芳は金、貫両論文を、自分に対する弁護というよりは批判として受けとめていたらしい。③

　呉時韻の批判にはたしかに極端な面があったが、その指摘はもっともなものでもあった。当時の詩を収めた現行の詩集『夜の歌と昼の歌』には、呉時韻の批判した「嘆息三章」「詩三首」の六首中、わずかに「詩三首」の最後の詩「なんども私は旧弊生活を離れた」一首

だけが収められている。④そして呉時韻の指摘した、「世界は地獄だ」「すべての人はみな無実の囚人だ」「私もあの武器を持った兵士の行列に加わって／血を見に、屍体を見に、死ににゆきたい……」、賈芝の指摘した「あの皺くちゃの汚れた顔の人の群」等の言葉が削除、改作されている。このことから何其芳の呉時韻の批評の受けとめ方の一端が伺えるのではないだろうか。

おわりに

何其芳が延安で書いた詩には、新しい我と旧い我の矛盾葛藤が表現されていて、そのために、その詩集も「夜の歌」と昼の歌」と名づけられたのであった。①

しかし当時の何其芳の苦悩が、自らの労農化を追求して果たせなかった、というものではなかったことは確かであると思う。彼の考えていたのはおそらく大衆との共存だったのではないか。したがって「夜の歌」等の詩も、自己変革の苦悩を歌ったものであった。小資産階級意識のままの自分を革命陣営の中に位置づけようと模索する苦悩であった。その解決には自己変革が必須のものであるわけだが、それが認識されるのは「文芸講話」以後のことである。何其芳は天津や成都で眼にした暗黒を打破しようとして延安へやって来た。暗黒は彼が自分の夢の中に閉じ込もることを許さなかったからだ。自己変革して労農化することは夢にも考えていなかったにちがいない。彼が抗戦、革命に求

めていたものは、もう一度心ゆくまで美しい夢を見つづけることのできる社会だったにちがいない。

一方、抗日戦初期には順調に発展していた解放区は、「一九四〇年から一九四三年にかけての、敵の大がかりな進攻と国民党政府の三回にわたる大規模な反人民闘争（いわゆる「反共の高まり」）とともにやってきたきわめて大きな困難であり、きわめて大きな矛盾」によって、「食糧が不足し、食油食塩も不足し、

被服も不足し、経費も不足するというたいへん困難な状態におちいった」。② この行き詰まりの状況が何其芳の苦悩に反映していたことは間違いないだろう。何其芳が延安で書いた詩は三九年七月に従軍から帰って以来、四二年五月の「文芸講話」を迎えるまでの期間に書かれるのである。とくに「夜の歌」の連作は四〇年に書かれたものであった。当時解放区を襲ったこの重大な危機がなかったとしたならば、何其芳はあるいはその詩に表現された

ような苦悩を味わうことがなかったかも知れないのである。

補記

話はとぶが「四人組」失却直後、何其芳は張春橋批判を中心とした「四人組」批判論文、「ディックから四人組」の狗頭軍師へ」①を発表したが、一九七七年第九期の「人民文学」誌上には彼の遺作として「毛沢東の歌」②が発表された。

この文章で何其芳は最初に、かつて中華人民共和国の誕生に際して書いた詩「我々の最も偉大な祝日」③の中の句を引用して、その瞬

間の感激を回想している。つづいて、白鬼を怕れない物語」の序文を、毛沢東の指示で執筆したときの会見（一九六一年一月四日、二三日）の様子を記している。二度目の会見のときに毛沢東は美学の問題を論じて、「それぞれの階級にはそれぞれの階級の美がある」と言った。するとある同志が「問題は同じものもあるということだ」と口を挟んだ。そこで毛沢東は「それぞれの階級にはそれぞれの階級にはまた共通の美がある。それぞれの階級にはそれぞれの階級にはまた共通の

美もある。」と口の味におけるや、同じく嗜むあり」と答えたというエピソードである。何其芽はまた、五星紅旗が人民政治協商会議の多数の支持を受けて、国旗に選定されたいきさつを述べている。我々が熱愛し美しいと感じている五星紅旗にも、国旗に選定される前には美しいか美しくないかという問題が存在した。さらに人民政治協商会議で五星紅旗が美しいと感じて投票した人の中には、もちろん労農兵の代表もいたが、小資産階級知識分子

の代表もいたので、ただひとつの階級、階層のみが五星紅旗を美しいと感じたわけではなかった。こうしてみると美とは決して単純な問題ではなくて、複雑な問題であることが分かる。私の考えには、それぞれの階級が感じている共通の美にもまた異るところ、異る階級性の差異がある。ちょうど一口の味におけるや、同じく嗜む有り」だけれども、同じ嗜みのうちにも異るものが含まれているようなものである。そしてこれは形式論理に

はかなっていないが、弁証法にはかなっている。それぞれの階級に共通の美があると認めるのは、人間性論にほかならない。たとえ、それぞれの階級の感じる共通の美は、やはり同じでもあり、やはり階級性の差があることを認めたとしても、それは絶対に完全な一〇〇%の人間性論である」という一面的

な見方をしている。

以上が何其芳論文の要旨であるが、「それぞれの階級に共通の美」に言及していることにもちろん何其芳は、それぞれの階級の美がある、という前提を認めたうえでそれを言っているのではあるが。

「文芸講話」以前の何其芳は、各階級を越えた共通面を強く認識していたように思われる。

だが、この私の身の上に

中国が見えないだろうか

私のおくれから

中国の後進性（おくれ）がみえないだろうか

私個人の歴史からも

旧世界の不合理が証明されないだろうか

革命の必然が証明されまいか。④

という詩句や、「ある平凡な物語」の中で、「画夢録」の世界から延安まで一筋の道が続いていると言ったことと、さらに「熟知している題

材を書け」という主張が示しているのは、彼のような小資産階級出身の者も、抗戦、革命への熱意、貢献は労農大衆となんのことともないという確信であろう。その確信があったからこそ「夜の歌」等のような詩を書くことができたのである。その確信を根底から打ち壊わしたのがほかならぬ「文芸講話」であった。そこで強調されたのは彼ら小資産階級と労農兵大衆との相異であって、共通性ではなかった。そしてその

後何其芳が追求したのは、この相異を乗り越えて労農兵の立場に移行するということであったはずである。何其芳の思想は穏健である。と言うことができる。厳格に教条主義を排除しながら、外国文学、中国古典文学の精髄を吸収しようとして来たものは真の人民大衆の文学であった。何其芳が死の直前に「それぞれの階級に共通の美」について言及したのは、果たして教条主義的な美観を排斥するという意味だけ

〔注釈〕

はじめに

① 丸山昇「中国における文学論と文芸政策――何其芳の一論文をめぐって」『現代中国文学の理論と思想』所収、日中出版、一九七四年。また新島淳良「文芸の『大衆性』をめぐって――何其芳と周揚――」では好意的に扱われている。『現代アジアの革命と法』所収、勁草書房、一九六六年

に止まることとなのだろうか。

② 今村与志雄「何其芳の『詩歌欣賞』について」『魯迅と伝統』所収、勁草書房、一九六七年。橋川文三「三〇年代知識論序説―何其芳とナップ。知識人を対象として」は今村を引用して同様のことを述べている。

③ 藤井昇三編『一九三〇年代中国の研究』所収、アジア経済研究所、一九七五年

④ 武田泰淳「臧克家と卞之林」『中国文学月報』第五六号所収、一九三九年

⑤ 黎活仁「何其芳評伝」(三)『波文』第一巻第四期所収、香港、一九七四年

① 「初版後記」『夜の歌と昼の歌』所収、人民文学出版社、一九五二年、

1. 「預言」の時期について

② 新島「何其芳『預言』の世界」早稲田大学政経学部『教養諸学研究』十四号所収

③ 新島「夜歌」の成立」『中国文学研究』第二号所収、一九六一年。および②

④ はこの三時期に分けて叙述している。

⑤ 新島③は三三年、黎活仁「何其芳評伝」(二)「波文」第一巻第三期所収は三二年と推測。「刻意集」、文化生活出版社、一九三八年、の「序」「夢の中の道」によれば失恋は第一輯以前、多分三一年夏。「ある平凡な物語」「星火集」所収、群益出版社、一九四九年に

⑥ 「夢の中の道」

⑦ 「序」「燕泥集後話」「刻意集」所収

が、「刻意集」の方が正確と考えられる。

は第一輯と第二輯の間とされる記述がある

⑧ ⑥に同じ

⑨ ②に同じ

⑩ 「ある平凡な物語」

⑪ ⑫ ⑬ ⑭

⑮ ②に同じ

⑯ ⑩に同じ

⑰ 「私と散文(代序)」「還郷日記」所収、上海良友復興図書印刷公司、一九三九年

⑱ ⑥に同じ

⑲ 黎活仁⑤、なお黎は「何其芳、樓棲氏の

講話―整風運動、文化大革命について」『
中国語研究者教育者代表団訪中報告書』所
収、藤堂明保等編、采華書林、一九六六年
（未見）を参考にして、天津の南開大学附
属南開中学、莱陽の山東師範学校の名をあ
げている。

⑳
㉑ ⑩に同じ

㉒ 『還郷日記』は『還郷雑記』（未見）の終
わりの三篇がなく、最後の一篇も一部が脱
落している不完全な出版物である。③の注

に詳しい。なお『散文選集』人民文学出版
社、一九五七年にこの三篇が収録されてい
る。

㉓ ⑰に同じ

㉔ 小野忍編『延安の思い出』、中国の革命と
文学9、平凡社、一九六二年所収の新島訳

2. 成都

① 『現実主義について』所収、上海文芸出
版社、一九六三年

② 1. の①に同じ

③ 1. の⑩に同じ

3. 「夜の歌と昼の歌」の時期について

① 1. の⑩に同じ

② 「私は延安を歌う」『星火集』所収

③ 1. の㉔所収の新島訳「私は延安をうたう」

④ の注② に同じ

⑤ 「快挙について」『星火集』所収

⑥ 1. の⑩に同じ

⑦ 1. の⑩。「後記一」『星火集』所収。「報告文学縦横談」『現実主義について』所収。「賀龍将軍を記す」『星火集続編』所収、新文芸出版社、一九五二年

⑧ 1. の⑩に同じ

⑨⑩ 「後記一」

⑪ 「重印題記」によれば第一版（重慶詩文学社、一九四五年）、第二版（上海文化生活

出版社、一九五〇年）ともに「夜の歌」として出版。改版に当り第二版から詩十篇を削除。

⑫ 1.の㉔所収の「中国文化」創刊号発表当時の全文の新島訳による。「夜の歌と昼の歌」所収のものは、この作者の語りが全文削除されている。

⑬ 詩集「夜の歌」が(一)から(七)までである。「夜の歌と昼の歌」には(一)から(五)までしかなく、この(一)は「夜の歌」所収

の(二)である。新島「何其芳「夜歌」の世界」「教養諸学研究」十六号。本論文の「夜の歌」は⑭以外は「夜の歌と昼の歌」による。

⑭ 新島⑬に訳出の「夜の歌」所収のものによる。

⑮「詩を書くことについて」「現実主義について」所収。1.の①に引用

⑯ 1.の①

⑰ 何其芳はかつて莱陽で、私は自分自身に感謝している、たった一人闇の中を手探り

で進みながら荊棘と岐路の道で迷わなかったのだから、と言った。「刻意集」「序」ま た1.の⑩では、学生運動をした人々は隊を組んで、手に手をとり合って延安にやって来たが、私は一人でやって来たと言っている。

⑱ 1.の③。また新島3.の⑬には「夜歌」は組織者であった。それは読者と作者の双方に、自己変革の渇望をそだてる」とある。他方1.の③には、「あるがままの自分を、無数

の歯車の一個として革命に役立っている存在だと観念することであった。彼の「我」は「消え失せた」のではなく、とてつもなく拡大したのである」とあって、矛盾している。

⑲ 「解放日報」一九四二年二月十七日

⑳ 「序」「刻意集」所収

㉑ 「大青山の七一五連隊」

㉒ 1.の⑩に同じ

㉓ 「文学教育について」「現実主義について」

所収

㉔ 「自己を解釈する」新島⑬に訳出

㉕ 「解放日報」一九四一年十二月八日。「夜の歌と昼の歌」に一部削除されて収録。

㉖ 新島「延安文芸座談会前の何其芳」「教養諸学研究」十七号によると「夜の歌」の「後記」に記述があるらしい。

4. 何其芳の詩をめぐる論争

① 「嘆息三章」は3.の⑲。「詩三首」「解放日報」、一九四二年四月三日

② 「夜の歌と昼の歌」に所収

③ 新島「何其芳と文芸講話」「教養諸学研究」十九号

④ 「夜の歌」には六首とも収録されている可能性がある。

おわりに

① 3.の⑯に同じ

② 「軍隊の生産自給、あわせて整風、生産

の二大運動の重要性について」『毛沢東選集』第三巻、外文出版社、一九六八年

補記

筆

① 『歴史研究』一九七六年六期

② 一九七七年一月二二日早朝三時三五分執

③ 『夜の歌と昼の歌』所収

④ 3.の㉔に同じ